

1. 新たな研究フィールドとの出会い

今回の研究は、東京大学社会科学研究所とBenesse教育研究開発センターとの共同研究である。このようなかたちでの研究は、社会科学研究所にとって、新しい試みといってよい。もちろん、従来から、研究所の研究スタッフが民間企業と協力して研究を進めることは少なくなかったし、産業界との連携によって寄付部門も設けられている。けれども、企業と共同で進める研究プロジェクトは、ほとんどなかった。

教育をテーマとする研究においては、学校現場は研究フィールドというだけにとどまらない。漠然とした研究関心は、学校現場を知る先生方の「現場の知恵」を得て、はじめて具体的な研究課題へ焦点化される。研究枠組みを構築するうえで、この「現場の知恵」が不可欠である。したがって、いかに適切な研究フィールドに出会えるかが、研究の質を大きく左右する。研究関心に対して適切で、かつ現場の知恵を得ることができるような研究フィールドに出会うことは、実は、それほど容易ではない。むしろ、きわめて困難だといったほうが正確だろう。さらに、ようやく出会った研究フィールドで実際に研究をおこなうためにも、多くの時間と労力を要する。

Benesse教育研究開発センターは、もちろん、学校現場そのものではない。だが、その活動は、現在、教育を受けている子どもたちや保護者と非常に近い位置にあり、その日常的な活動を通じて、学校現場とはやや異なる現場の知恵を蓄積している。しかも、その現場の知恵から、より深く知る必要があると認識された問題について、多くの独自調査をおこなってきている。今回の共同研究で分析をおこなった「学校教育に対する保護者の意識調査2008」も、その一環として得られた調査データである。このデータを、共同で分析していく機会を得たことで、私たちは、新たなフィールドとの出会いかたを経験することができた。

2. 調査データという社会的資源とデータアーカイブ

すでに述べたように、Benesse教育研究開発センターは現場の知恵を蓄積し、それにもとづく問題関心から、多くの調査を実施してきた。ただし、調査データが十分に分析し尽されているかという点については、一定の留保が必要であろう。数多くの調査を実施している研究者や研究機関のスタッフであれば誰でも思い当たるように、いくつもの調査を実施していると、調査の企画・設計と実査とに追われてしまい、せっかく収集したデータの分析に時間をかけることが難しくなる。時間制約のために、単純集計レベルや簡単なクロス集計で報告書を作成するだけで、一連の作業を終了させざるを得ないことも起こる。

上記のような事態は、その事情は十分に理解されるものの、調査データという社会的資源を有効に活用していないという点では問題であろう。そのまま廃棄されたり散逸したりしてしまうような場合は当然、社会的資源の無駄遣いというほかない。

社会科学研究所では、調査データという社会的資源を有効に活用するために、SSJデータアーカイブ(Social Science Japan Data Archive)を設立し、1998年4月から調査データの外部提供をおこなっている。データアーカイブでは、調査主体から寄託されたデータを保管して散逸を防ぎ、二次分析のために提供する機関である。欧米では、ほとんどの国でデータアーカイブが設立されており、社会科学分野の研究・教育に活用されている。日本では、SSJデータアーカイブが最初の本格的データアーカイブである。

調査の企画・設計者による分析を一次分析、一次分析が終了してからおこなわれる第三者による分析を二次分析という。データの二次分析は、そのデータがもつ可能性を開く点に特徴がある。第一に、一次分析が簡単なレベルであった場合に、より詳細な二次分析をおこなうことで、より意義深い知見を

引き出すことができる。第二に、異なる分析枠組みや視点からの分析によって、調査主体が想定もしなかった知見を得ることもありうる。二次分析を通じて、その調査データから、より多くの知見を導き出すことは、回答を寄せてくれた調査対象者の協力に対するフィードバックを豊かなものにするという意味もある。

Benesse教育研究開発センターには、こうしたデータアーカイブの意義を深く理解して多くの調査データをSSJデータアーカイブに寄託いただいているだけでなく、二次分析の普及についても協力をいただいている。今回の共同研究は、SSJデータアーカイブに対するBenesse教育研究開発センターのこれまでの協力の延長線上に位置づけられる。二次分析ではなく、ほぼ一次分析に近い分析であった点が、これまでとは異なるといえるだろう。

3. エヴィデンスにもとづく教育政策

冒頭でも述べたが、今回の共同研究は、研究者にとっては新たなフィールドとの出会いであった。また、実証的なデータを研究者がさまざまな視角から分析することによって、データの可能性を大きく引き出すことができたと自負している。

この十数年、教育をめぐるさまざまな社会的問題が生じているといわれてきた。これらの問題に対処するため、一連の教育改革がおこなわれてきたが、これらの改革によって教育にかんする問題が沈静化したとはいえない。むしろ、改革が混乱に拍車をかけてきた側面もある。なぜ人々は、あるいは社会は、教育や学校に問題を見出し続けるのだろうか。

「理想と現実」という言葉があるが、教育をめぐる人々の言説は、この両者がしばしば混同される。自分の考える理想の学校ではないから、現在の教育には問題がある、というように。あるいは、政策が「生きる力」を育てるという理想を課題として掲げるように。だが、教育が社会的に重要であるならば、なおさら理想と現実を切り離す必要がある。経済や政治をみてもわかるように、重要な社会システムほど、理想が実現することは困難である。経済や政治では、理想像を実現することではなく、現実に存在する問題点を解決することが政策課題となる。教育が例外なのは、なぜなのだろうか。

教育においては、人間の潜在的な可能性を開かせることや、その過程における人間的なふれあいがクローズアップされることが多い。これらは、もちろん、重要な論点であるが、現代社会において、教育はまず政策である。有効な政策を構築するうえで不可欠なのが、客観的な現状分析である。この現状分析にもとづく政策を「エヴィデンスにもとづく政策」という。日本の教育政策に最も欠けているのがエヴィデンスにもとづく政策である。客観的な現状分析には、実証的な調査データが最も有効である。多変量解析をもちいて潜在的な要因を探り出すことができれば、その可能性はさらに広がる。このような分析を膨大に蓄積して、そのうえで政策は決定されなければならないが、教育については実証的な分析が圧倒的に不足している。

とくに、現在、学校と保護者との関係が社会的に着目されているが、この問題についての客観的な大規模データは、ほとんど存在しない。多くの事例が報告されているが、その大部分は、当事者である教師からの報告による。このような状況では、学校と保護者との関係を改善する有効な政策が得られるはずもない。

今回の共同研究は、学校と保護者との関係に着目した貴重な実証的なデータによっておこなわれた。より有効な政策決定につながるような実証分析を蓄積していくことが、研究者の役割である。今回の共同研究の成果がエヴィデンスにもとづく政策の第一歩となることを願ってやまない。

本調査は、保護者の学校教育に対する意識を明らかにすることを目的に実施している。2004年と2008年の2回にわたり同様の調査を行っており、経年比較ができるような設計がなされている。

本調査の特徴は、以下のようにまとめることができる。

1. 時代による変化を把握できる

本調査は、時系列で調査することを目的として企画されている。学習指導要領の改訂前と改訂後において保護者の学校教育に対する意識がどのように変化しているのかをとらえることが可能である。

2. 小学校と中学校の保護者の違いを把握できる

本調査は、全国の公立小学校と公立中学校に通う児童・生徒の保護者を対象としている。そのため、小学校と中学校の保護者による学校への意識の違いや、習い事や塾など学校外教育の実態についても比較をすることができる。

3. 保護者の属性による意識の違いを把握できる

本調査では、保護者の学歴や経済的なゆとりなど、保護者の属性による分析ができるような設計がなされている。

※この調査は、朝日新聞社と共同で企画・実施したものである。なお、調査結果の分析にあたっては、東京大学社会科学研究所と共同研究を行い、その研究の成果をまとめたのが本報告書である。

■調査テーマ

保護者の学校教育に対する意識

■調査方法

学校通しによる家庭での自記式質問紙調査（子どもを経由した配布・回収）

■調査時期

【2004年調査】

2003年12月～2004年1月

【2008年調査】

2008年3月

■調査対象

【2004年調査】

全国の小2生、小5生、中2生をもつ保護者6,288名（配布数8,503名、回収率74.0%）

調査協力校：公立小学校26校、公立中学校20校

【2008年調査】

全国の小2生、小5生、中2生をもつ保護者5,399名（配布数6,901名、回収率78.2%）

調査協力校：公立小学校21校（うち前回実施17校）、公立中学校19校（うち前回実施14校）

※単年度での分析に際しては、2008年調査全体の結果を用いた。また、経年での変化をみる際は、継続実施校（小学校17校、2004年2,495名、2008年2,782名；中学校14校、2004年1,515名、2008年1,603名、図表では継続校と表記）に限って分析を行った。

サンプル数

(名)

		全 体	小2生	小5生	中2生	学年不明
2004年	全 体	6,288	2,038	2,068	2,120	62
	継続校のみ	4,010	1,207	1,251	1,515	37
2008年	全 体	5,399	1,621	1,727	1,972	79
	継続校のみ	4,385	1,329	1,389	1,603	64

調査地域

	小学校	中学校
2004年	18都県	18都県
	宮城、山形、福島、長野、千葉、東京、富山、新潟、愛知、三重、和歌山、島根、岡山、広島、高知、福岡、長崎、鹿児島	福島、群馬、千葉、東京、新潟、富山、岐阜、山梨、静岡、兵庫、奈良、和歌山、山口、徳島、愛媛、福岡、佐賀、宮崎
2008年	13都県	16都県
	山形、福島、千葉、東京、新潟、富山、愛知、三重、滋賀、広島、山口、長崎、鹿児島	福島、群馬、千葉、東京、神奈川、新潟、岐阜、静岡、兵庫、奈良、徳島、愛媛、福岡、佐賀、大分、宮崎

調査項目

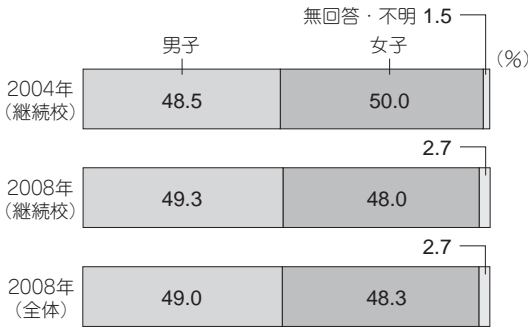
学校や学校外の教育に期待すること/学校に望むこと/学校や先生とのかかわり/学校の取り組みへの満足度/習い事や塾/子どもの学習の様子/教育費/希望する進学段階/中学受験/教育改革の取り組みについての賛否/取り組みの実施や制度変更についての賛否/教育をめぐる意見/学習指導要領の改訂/授業時間の増加を希望する教科/子ども・家庭・地域・学校の様子/教育予算の配分についての意識

ここでは、2008年調査全体の属性を中心にみていく。経年比較に用いる継続実施校のみの回答者の属性についても図示しておく。

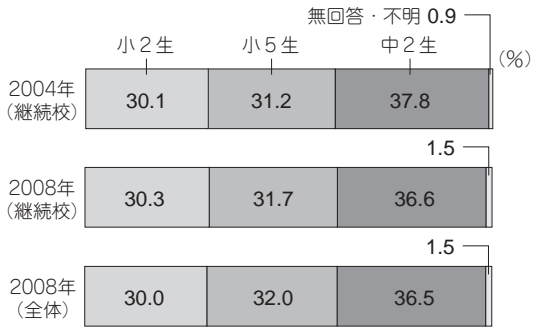
A 子どもの属性

- ◆子どもの性別は、08年調査全体では「男子」「女子」ともにほぼ半数となっている（図A-1）。
- ◆子どもの学年をみると、「中学2年生」が36.5%と「小学2年生」、「小学5年生」に比べて全体に占める割合がやや高いものの、学年による偏りは少ないといえる（図A-2）。
- ◆子どもの出生順位をみると、「第2子以降」が50.1%、「第1子」47.9%となっている（図A-3）。
- ◆子どもの人数は、「2人」が50.3%と最も多く、次いで「3人」が29.4%となっている。「1人」は約1割にとどまる（図A-4）。

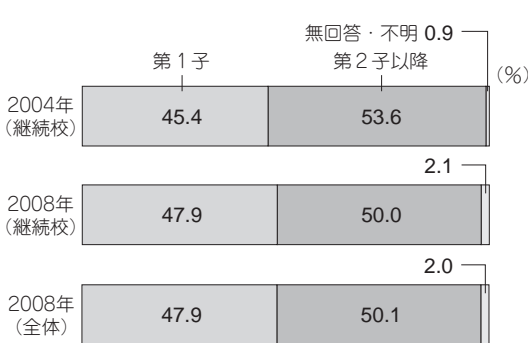
図A-1 子どもの性別



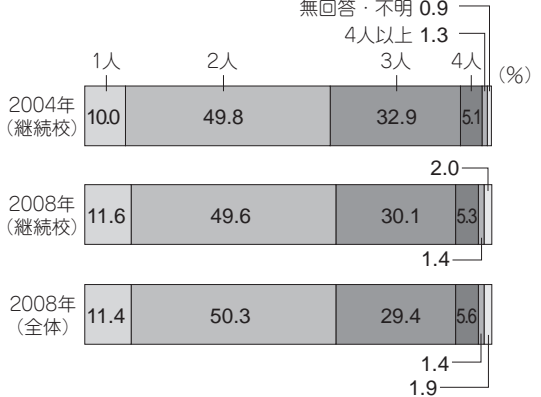
図A-2 子どもの学年



図A-3 子どもの出生順位



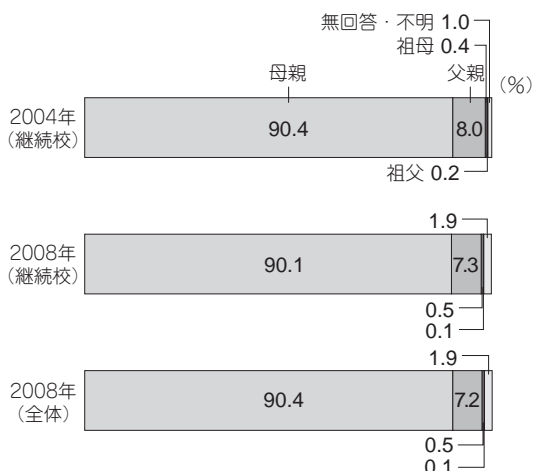
図A-4 子どもの人数



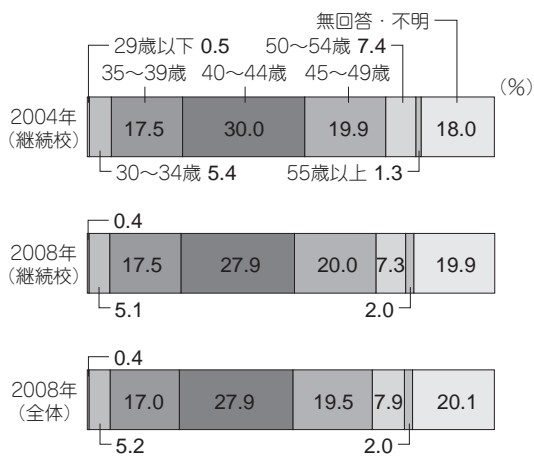
B 保護者の属性

- ◆子どもとの続柄をみると、約9割を「母親」が占めており、「父親」を含めた母親以外の回答は1割に満たなかった（図B-1）。
- ◆父親の年齢は、「40～44歳」27.9%、「45～49歳」19.5%と40代が約5割となっている（図B-2）。
- ◆母親の年齢をみると、「40～44歳」が31.7%ともっとも多く、次いで「35～39歳」27.8%となっており、父親に比べると少し年齢が若い（図B-3）。
- ◆母親の職業は、「パートやフリー（在宅ワークも含む）」が約4割、「常勤（フルタイム）」が約3割と働いている母親が全体の約7割を占めている（図B-4）。
- ◆父親の学歴は、「非大卒」が約6割に対して「大卒」は約4割であった（図B-5）。
- ◆母親の学歴は、「非大卒」が約7割、「大卒」が約3割と、父親に比べると非大卒の割合が高い（図B-6）。
- ◆経済的なゆとりをみると、「ゆとりがない」（「あまりゆとりがない」と「ゆとりがない」の合計）が約6割と多く、「ゆとりがある」（「ゆとりがある」と「多少はゆとりがある」の合計）が約3割にとどまっている（図B-7）。

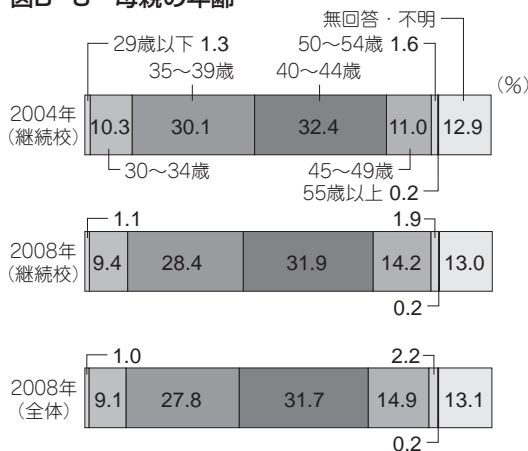
図B-1 子どもとの続柄



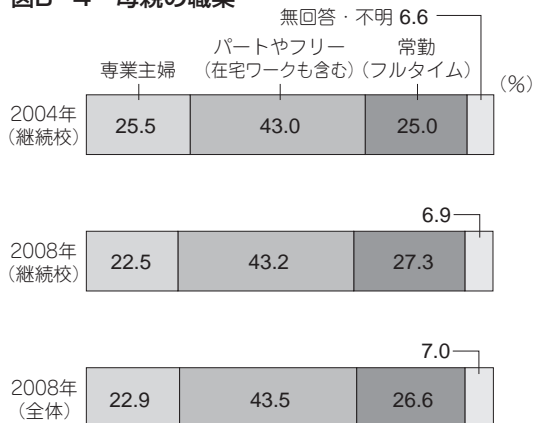
図B-2 父親の年齢



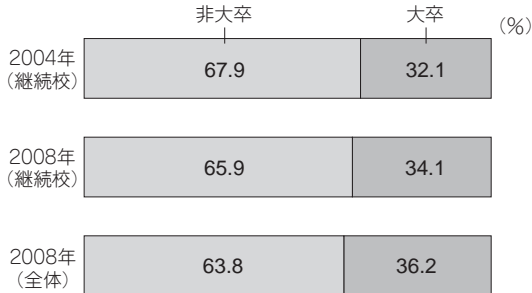
図B-3 母親の年齢



図B-4 母親の職業

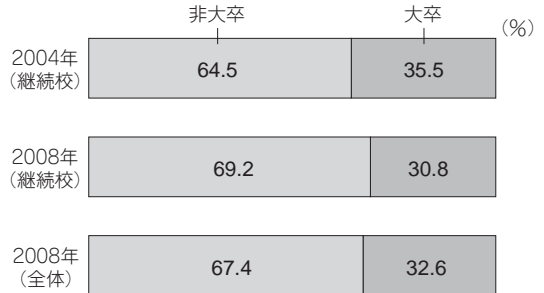


図B-5 父親の学歴



注) 父親が「あなたは大学・短期大学を卒業している」の質問に○をしたケースと、母親が「あなたの配偶者は大学・短期大学を卒業している」の質問に○をしたケースを「大卒」とし、「非大卒」は100%から「大卒」の数値を引いて算出した。

図B-6 母親の学歴



注) 母親が「あなたは大学・短期大学を卒業している」の質問に○をしたケースと、父親が「あなたの配偶者は大学・短期大学を卒業している」の質問に○をしたケースを「大卒」とし、「非大卒」は100%から「大卒」の数値を引いて算出した。

図B-7 経済的なゆとり

